

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 日本語とラテン語、そして日本語教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: カイザー, シュテファン, Kaiser, Stefan メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000276

日本語とラテン語、そして日本語教育

シユテファン カイザー

筆者は、当時のドイツのギムナジウムで必修となっていたラテン語を、9年間学習させられた。しかし、ラテン語が必要な、医学部などの専攻を希望していたわけではなかったため、将来的に役立つものとは考えていなかった。大学では、日本語を選び、最終的に日本の言語学分野を専門とした。そして、豪州と英国の大学で日本語を教えるようになり、その後日本の大学でも日本語教育を担当してきた。

キャリア半ばまで気づくことはなかったが、実は題目にある3領域には接点があった。周知のように、ラテン語は中世ヨーロッパでは学術言語で、日本語関係でその(遅い)例となるのがシーボルトの *Epitome Linguae Japonicae* (『日本語要略』、一八三二)である。シーボルトは出島のオランダ商館に医師として所属していたが、シーボルト事件で国外追放にあつてからバタビアの学術雑誌にこの『要略』を掲載した。ただ、1、2か所にオランダ語の痕跡が見えるので、どうやらオランダ語の原稿を出版するためにラテン語に翻訳したらしい。本著には動詞などの活用形の説明があり、過去形は語尾の「*e*」を「*i*」に替え、「*is*」を加えて作ると説明している。

シーボルトを遡ること二五〇余年、イエズス会の宣教師が九州を中心に布教活動をしていたが、彼らの作った教育機関で西洋人も日本人も学んだが、カリキュラムの核がラテン語であつた。イエズス会の残した日本語記述の「金字塔」はポルトガル語で綴られた『日葡辞書』や『日本(大)文典』に他ならないが、それ以前には『ラポ日対訳辞書』と、『天草版ラテン文典』が作られた。

『対訳辞書』も、『ラテン文典』もラテン語の学習に使用されたと思われるが、後者は Manuel Alvarez De

Institutione Grammaticaをもとにしている。リスボンで一五七二年に出版されたこの文典には、翌年に同じ表題の簡約版が作られ、それぞれ *arte grande* (大文典)・*arte pequena* (小文典) の系統として、多くの版を重ねた。天草版はこの「小文典」系統に基づいているが、動詞などの活用に日本語訳や日本語文法の説明を加えている。日本語訳は主として日本人の学習者のためで、原典のポルトガル語による対訳が日本人にはわからないからと *Admonitio* (巻頭の勧告文) で述べてある。一方、日本語の説明は西洋人学習者のためであろう。

では、前掲シーボルトの活用形の作り方は本著でどうなっているだろうか。現在分詞を例にとると、未完了過去の一人称の音節 *Bam* または *Ba* を *Ns* に代替して作られるとある。例としてあげているのは *Amabam*・*Amans*・*Completetbar*・*Complectens* (前者は能動動詞、後者は異態動詞で、形式上受け身の形をとるもの)。ギムナジウムで使っていた文法書を確認すると、各時制の語幹が示され、第一活用現在の形が *em* や *o* とある。現在分詞は、動詞の各名詞形語尾の中の *ens* に当たる。この体系的な記述に対して、時制として無関係な形からの派生方法はアドホックといわざるをえない。タイトルにある *Institutio* には「教育」の意味があるので、本書は教育文法といえる。

弱冠15、6歳のころ来日し、おそらくアルバレスの文典でラテン語を習得したロドリゲスは形の作り方をどう説明しているか。(旧仮名遣いの) 土井忠生訳の『日本大文典』で見ると、五段動詞に当たる記述の「過去を知る為の一般法則」の中で次のようにいう(一部抜粋)。「*Gui* (ぎ) は *ida* (いだ) とかはる。例へば、*Anogui* (仰ぎ)・*auoida* (仰いだ) …」。「*Qui* (き)・*Ki* (し) は *ita* (いた) とかはる。例へば、*Quiqui* (聞き)・*qujita* (聞きた) …」。「*Mexi* (召し) は *mexita* (召した) …」。

この現実的な方法は、現在の日本語教育でも継承されている。例えば『みんなの日本語』では、次のように説明している(原文、英語)。「ます形」の最後の音が「き・ぎ」の場合、「き・ぎ」を落として、「いて・いで」をつける。例えば、かきます↓かいて いそぎます↓いそいで(14課)。また19課で導入される「た形」は同じ原理で説明できるはずだが、より簡単に「て」を「た」に置き換えるという。

教育文法は、時代を問わず、ルールよりも実用性を優先するものである。